

ルソーの夢

——むすんでひらいて考(その十一)——

海老沢 敏

八、讚美歌としての《ルソーの夢》(承前)

こうして讚美歌となった《ルソーの夢》は英国ならびにアメリカ合衆国で出版された各会派、教派用の讚美歌集に収められ、《グリーンヴィル》、あるいは《ルソー》といった名称とともに、各種の歌詞がつけられて歌われていくが、音楽的に見るといくつかのヴァリアント、異稿が見られるのである。そうした異稿を対照させたものが譜例①である。

最下段の原曲《ルソーの夢》と対比させてみると、第四章

《ルーサウ氏が睡眠中夢に作りたる曲》で紹介したメイスン他編集の《アプライジド・フォース・ミュージック・リーダー》に収録された讚美歌のかたち①が、とりわけ原曲に近いことが理解されよう。附点つき音符の動き、二小節目の三度音程の下降形、第六小節の前半の音の動き、そして最後の小節の動きなどが、そうした近さを明らかに示し、わずかに第六小節後半の三度下降が、同音反復に変えられていて、さらにさかのほって《ルソーの夢》原曲《ルソーの新ロマンス》の当該個所の音の動きを再現している。②の例は、附点音符の動きは、①の三度下降(第二小節後半、②では第四小節)や同音進行(第六小節、②では第十二

▼譜例①

THE ABRIDGED FOURTH NATIONAL MUSIC READER (1898)

11

GREENVILLE SONGS OF CHRISTIAN PRAISE (1882)

12

ROUSSEAU GOLDEN BELLS (GOLDEN HYMNAL) (?)

13

GREENVILLE HYMN AND TUNE BOOK (1871)

14

ROUSSEAU ONE HUNDRED TUNES (?)

15

ROUSSEAU'S DREAM

16

17 a.c.

18 a.c.

19 a.c.

20 a.c.

21 a.c.

22 a.c.

小節)に取って代り、かつ第六小節(第十一小節)では逆に附点リズムによる三度の下行進行が同音進行に変えられ、おなじような操作が第八小節(第十五小節)でもおこなわれているというケースである。

③ならびに④の例は、附点音符の動きが、同じ音価の動きに平均化されている点で共通しているが、一方、第二小節、第六小節では三度下降進行と音階的進行のちがいがあり、③のほうが原曲《ルソーの夢》に近いが、この③の最終小節の音の動きはさらにさかのぼって《ルソーの新ロマンス》のそれである。

以上の例はいずれも《ルソーの夢》と同じくへ長調をとっているが、最後の⑤は、ニ長調の調号になり、かつアウフタクトではじまっている点に特徴があるほか、旋律のかたちは《ルソーの夢》の動きに近いものである。

こうした変化を伴ないながらも、讃美歌としての《ルソーの夢》、すなわち多くの場合《グリーンヴィル》と称された旋律は、英米圏を中心に十九世紀から二十世紀にかけて、教会で歌われつづけ、また家庭でも口ずさまれたものであった。その間、一八七〇年代、すなわち明治初年に日本にも渡来したことはいずれ章をあらためて述べることになるだろう。予備的に一言すれば、その日本では、讃美歌としてのこの旋律は、すでにその役割を終えて

しまっている。だが、日本以外の国々ではけっしてそうではない。

たとえばキャサリン・スミス・デイル編の《讃美歌索引》^(注9)(一九六六年)は、合計七十八篇の讃美歌集の内容を収録しているが、十九世紀に刊行された古い讃美歌集から出版年の一九六六年のものにいたるこれらの曲集中、計十六冊が《グリーンヴィル(ルソー)》のメロディーを掲載していることが示されている。その旋律形は《ミー・ミ・レ・ドー・ドー・レー・レー・ミ・レ・ドー》であり、一冊だけが《ミー・ミ・レ・ドー・ドー・レー・レー・ミ・レ・ドー》の形をも収めている。これらの讃美歌集はメソジスト派、ルター福音教会派、ルター・アウクスブルク派、長老教会派(米国)、スコットランド教会、カナダ統一教会、カナダ長老教会、バプティスト(浸礼)派、メソ派、モルモン教派、新教会派、英国バプティスト派と種々の教派に亘り、しかも、第二次大戦前のもは言うにおよばず、戦後のものも少なくないものである。ということは、《グリーンヴィル(ルソー)》が讃美歌の旋律として、現在もおお生命を失っていないことを示しているというべきであろう。

(注9) Katharine Smith Diehl《Hymns and Tunes—an Index》(New York & London, 1966.)

▼譜例②

165 禮拜散時歌 教會：公共禮拜
 LORD, DISMISS US WITH THY BLESSING GREENVILLE 8. 7. 8. 7. D. JEAN J. ROUSSEAU, 1712-1778
 劉廷芳侯爵與合唱，一九三四 JOHN FAWCETT, 1773

1. 禮 拜 散 了 懇 求 祝 福 喜 樂 平 安 滿 我 心
 2. 因 爲 主 的 怨 樂 福 音 我 們 感 謝 歡 欣 榮 耀
 3. 將 來 我 聞 主 愛 呼 聲 聲 我 們 長 離 人 世 時

求 使 各 人 有 主 真 愛 仰 頌 救 恩 常 得 勝
 但 願 主 關 心 的 教 徒 果 實 多 充 滿 我 不 得 心 勝
 生 死 關 頭 主 恩 然 無 懼 懼 然 應 召 我 不 得 心 勝
 養 我 精 神 養 我 精 神 經 過 曠 野 路 程
 求 主 臨 格 求 主 臨 格 水 同 住 主 曠 野 們 活 中
 願 永 遠 願 永 遠 遠 遠 遠 遠 遠 遠 遠 遠 遠 遠 阿 們

英米のプロテスタント教会を中心に、この《グリーンヴィル》が現在なお讚美歌として歌われている事実は、次に紹介する二つの事例からも明らかとなるだろう。

ひとつは、一九七二年、香港で出版された《普天頌讚》^(注10)なる讚美歌集である。この歌集の第一六五番《禮拜散時歌》はジョン・

フォーセット（一七七三年）の讚美歌《かみよみめぐみを われらに下さる》(Lord, dismiss us with Thy blessing)であるが、《グリーンヴィル》の表示とともに《ジャン・J・ルソー、一七一七—一七七八》と作曲者の指示を与えている（譜例②）。この楽譜はへ長調、四分の二拍子で附点つきの動きをもっており、譜

例①の②のかたちであることは明らかであろう。この讚美歌集には、もうひとつ第四二三番〈医務救世歌〉としてゴドフリー・スリング（一八七〇年）の讚美歌〈病める者と死にゆく者は主に向つて (Thou to whom the sick and dying)〉を収められている。

が、これにはヘルソー（聖体拝受）とあり、〈ジャン・ジャック・ルソー一七二二—一七七八〉と記されている（譜例③）。この讚美歌で注目されるのは、ホ長調の調号である。四分の四拍子をとるこの〈ヘルソー〉は、附点の動きをとらぬかたちのもので

▼譜 例③

422

醫務救世歌

特殊：醫院病人

THOU TO WHOM THE SICK AND DYING
ROUSSEAU (COMMUNION)

郭方智譯、一九二九
GODFREY THING, 1870

8. 7. 8. 7. 8. 7.

JEAN JACQUES ROUSSEAU, 1712-1778

【醫院用】

第 165 首調 Greenville 為水調之另一體式：其百律序
8. 7. 8. 7. 號，和聲亦相異。讀者因宜選取可也。

あり、かつヘミー・ミ・レ・ドー・ドー／レー・レー・ミー・ミ・ド
ーの動き、そして中間部のしめくりの部分でのヘミー・ミ・
ファ・ソー・ソー・ラー・ド・ラ・ソーの動きによって、譜例
①の③と、拍子のちがいはあれ、共通した稿といえよう。この第
四二二番には脚注として「第一六五首調 Greenville 為本調之另
一体式・其音律為八・七・八・七・隻、和声亦相異。読者因宜選
扱可也」とあり、第一六五番の異稿であり、和声処理もまたこと
なっている点を説明している。

(注10) 《普天頌讚(線譜本)》編訂者 聯合聖歌委員会 発行
人、黄 永熙 出版兼発行者 基督教文芸出版社 主曆一九
七二年九月港十一版 (Hymns of Universal Praise. (Music
Edition). Edited by The Union Hymnal Committee. Tenth
Hong Kong Edition, 1972. Chinese Christian Literature
Council.)

この中国系の香港の出版物によって、すくなくとも香港では現
在はなおプロテスタント教会で《グリーンヴィル》が、ルソーの
名を伴って讚美歌として位置づけられ、歌われていることがた
しかめられるのである。

もうひとつの事例を挙げておこう。昭和五十三年(一九七八

年)五月二十二日付の朝日新聞夕刊に掲載された(特派員メモ
は《歌の国籟》と題されたものであるが、その一節を引証してみ
よう。「アンゴラのカトリック教会では《結んで開いて》を聞い
た時もびっくりした。日曜日の祈りのあと、大人も子どもも一心
に歌っている。信徒に「日本の子どもは歌ではないですか」と聞
くと、相手はいぶかしげに「古くからある讚美歌です」と答え
た。」ダルエスサラームの伊藤特派員のこの報告は、彼がこの《グ
リーンヴィル》を「日本の子どもは歌、すなわち《結んで開い
て》として捉えているという興味深い事実を伝えているが、その
点については後章にゆずるとしても、アフリカの地でもこの《グ
リーンヴィル》が教会で歌われているという情報を与えてくれる
点で貴重である。《アンゴラのカトリック教会》とあるのは、あ
るいはプロテスタント教会のあやまりではないかとも推測され
る。いずれにしても、アジアやアフリカでも、この旋律が今なお
讚美歌として歌われつつづけていることが明らかとなったことは、
この《ルソーの夢》の世界的な規模での伝播現象の一端をはっき
りとしたかたちで示す点で重要な意味をもっている。こうしたこ
の曲の伝播現象がこの章の対象としての《讚美歌としての《ルソ
ーの夢》》にとどまらないことは、つづいて諸章でもやがて明らか
にされることだろう。

ここで《グリーンヴィル》につけられた歌詞についても、ごく簡単に触れておくべきであろう。《グリーンヴィル》の原形が、ウォーカーによる《リボン博士の讚美歌集》への姉妹編ではじめて登場する《ルソー夢》の讚美歌への転用であることは本章の最初に述べたが、そのテキストは《讚美歌五六七》あるいは五四一D、R、S、またはコリヤーズ博士六六八（十八世紀）と指示されている。このテキストは《我を導きたまえ、おお、汝偉大なエホバよ（Guide me, O Thou great Jehovah）》とはじめられるもので、一般にウィリアム・ウィリアムズ（一七一七年—一七八一年）の作といわれている。彼はウェールズのカルヴィン派教会の説教師であった。この讚美歌は英国でひろく歌われるに先立って米国で愛好されたという。このテキストは十九世紀の十年代に《ルソーの夢》と組み合わせられて以来、十九世紀を通じて《グリーンヴィル》のメロディーによって歌われることが多かったのである。

もうひとつ、《グリーンヴィル》にあてられる讚美歌歌詞としては《主よ、汝の御恵みを我らに与えたまえ（Lord, dismiss us with thy blessing）》が著名である。これはすでに名を挙げたことのあるジョン・フォシット（一七三九年—一八一七年）作のもので、この讚美歌が最初に公刊されたのは一七七四年と伝えら

れている。フォシットはヨークシャーのブラドフォドの出身のバプティスト派（はじめメソヂイスト派）の牧師であり、数多くの歌詩を作っており、ひろく歌われたものであった。これら讚美歌のテキストについては、日本の讚美歌としての《グリーンヴィル》を扱う後章で触れることにしたい。なお、外国の讚美歌集では、ほかにもさまざまなテキストがこの《グリーンヴィル》につけられている。

（つづく）
（国立音楽大学）

